第1部　エッセイ

テーマ「思い出のお弁当」

一般の部

常田富士男賞

海苔一枚

柴野　裕治

「それじゃ、行ってくるで」

油で汚れた作業着姿の父は、縦長の黒い弁当箱を肩に掛けて家を出る。アルミ製のランチジャーには、ご飯もおかずも味噌汁も入っていて、昼までほんのり温かい。

父の弁当を作るため、母は家族よりずいぶん早く起きていた。白いご飯の上には、醤油をくぐらせた大きな海苔が一枚。小学校の給食も嫌いではなかったが、父の弁当がうらやましくて仕方がなかった。

夏休みになっても母は昼に帰宅し、兄と私の昼食を作っては職場へ戻っていった。温かいご飯は食べられても、父のような弁当にはありつけない。私はある日ねだった。

「お父さんみたいなお弁当が食べたい」

父は快く弁当箱を貸してくれ、翌朝、母は私のために父と同じ弁当を詰めてくれた。

夏の朝、私は弁当箱を提げ、父の真似をして家を出た。向かった先は母の実家。突然現れた私に祖母は驚いたが、わけを話すと笑って迎えてくれた。

昼を待ちかねてふたを開けた。海苔をのせたご飯、鮭、卵焼き、がんもどき、トマトとレタス。味噌汁は口に含むとまだ温かい。祖母の家まで自転車を走らせ、好かせたおなかには何よりのごちそうだった。

夢中で頬張る私に、祖母がぽつりと言った。

「家族を支える弁当だねえ」

なんでと聞き返す私に、祖母は続けた。

「家族のために働くお父さんを、お母さんが弁当で支えてるんよ」

あれから三十年近く、父は定年の日まで、毎朝

母の弁当を持って仕事へ通った。
　今では私も弁当を作ることがある。白いご飯に海苔を一枚のせるたび、肩に黒い弁当箱を提げた父の背中と、それを送り出した母の姿が浮かぶ。耳の奥で、今も父が台所に向かって呼びかける。
「行ってくるで」